

日蓮大聖人御書全集

まつのどののごけあまごぜんごへんじ

松野殿後家尼御前御返事

新版
2000
〜
2004

まつのどののごけあまごぜんごへんじ

松野殿後家尼御前御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

まつのどののごけあま

弘安2年('79) 3月26日

58歳

松野殿後家尼

ほけきようだいご

まき

あんらくぎようほん

い

もんじゆしり

法華経第五の巻の安樂行品に云わく「文殊師利よ。この

ほけきよう

むりよう

くに

なか

ないしみようじ

き

法華経は無量の国の中において、乃至名字をも聞くことを

う

うんぬん

得べからず」云々。

もん

こころ

われ

しゆじよう

さんがいろくどう

りんね

この文の心は、我ら衆生の三界六道に輪回せしことは、

てん

う

にん

う

じごく

あるいは天に生まれ、あるいは人に生まれ、あるいは地獄に

う

がき

う

ちくしよう

う

むりよう

くに

生まれ、あるいは餓鬼に生まれ、畜生に生まれ、無量の国

しょう

むへん

くる

楽

値

に生をうけて、無辺の苦しみをうけて、たのしみにあひし

いちど ほけきよう くに しよう

かども、一度も法華經の国には生ぜず。たまたま生うまれた

なんみようほうれんげきよう とな

唱

りといえども、南無妙法蓮華經と唱えず。となうることは

夢 無

ひと もう き

ゆめにもなし。人の申すをも聞かず。

ほとけ 譬

と たも

いちげん

かめ

う

ぎ

あな

あ

仏のたとえを説かせ給うに、一眼の亀の浮き木の穴に値

譬 たも

いがたきにたとえ給うなり。

こころ

たいかい

なか

はちまんゆじゆん

そこ

かめ

もう

たいぎよ

心は、大海の中に八万由旬の底に亀と申す大魚あり。

てあし

鰭

はら

熱

鉄

焼

手足もなく、ひれもなし。腹のあつきことは、くろがねのや

背 中

甲

寒

せつせん

似

けるがごとし。せなかのここのさむきことは、雪山にいた

うお

ちゆうやちようぼ

願

じ じこつこく

くち

遊

り。この魚の昼夜朝暮のねがい、時々剋々の口ずさみには、

腹をひやし、こうをあたためんと思う。赤梅檀と申す木を

しょうもく

な

ひと

なか

しょうにん

よ

いっさい

き

ぼん

ば聖木と名づく。人の中の聖人なり。余の一切の木をば凡

もく

もう

ぐにん

せんだん

き

うお

はら

冷

木と申す。愚人のごとし。この梅檀の木は、この魚の腹をひ

き

き

上

はら

あな

い

やす木なり。あわれ、この木にのぼりて腹をば穴に入れて

甲

てん

ひ

当

温

もう

ひやし、こうをば天の日にあててあたためばやと申すなり。

じねん

理

せんねん

いちどい

かめ

自然のことわりとして、千年に一度出ずる亀なり。しか

難

たいかい

ひろ

かめ

小

れども、この木に値うことかたし。大海は広し、亀はちいさ

う

ぎ

希

余

浮

木

値

し、浮き木はまれなり。たといよのうきぎにはあえども、

せんだん

かめ

はら

彫

嵌

梅檀にはあわず。あえども、亀の腹をえりはめたるように、

涯 ぶん そうおう

う ぎ あな 値 難

わ み 落

がい分に相応したる浮き木の穴にあいがたし。我が身おち

い 甲

温 難 たれ

取 上

入りなば、こうをもあたたためがたし。誰かまたとりあぐべ

あな 狭

はら あな い 得

なみ 洗

き。また穴せばくして、腹を穴に入れえずんば、波にあら

落 たいかい 沈

おとされて、大海にしずみなん。

ふ し ぎ

せんだん う ぎ あな

い 値

たとい不思議として梅檀の浮き木の穴にたまたま行きあ

わ いちげん n 僻

ゆえ う ぎ にし 流

えども、我が一眼のひがめる故に、浮き木西にながるれば

ひがし み ゆえ 急

乗 おも 泳

東と見る故に、いそいでのらんと思っておよげば、いよい

遠 ひがし なが

にし み なんぼく

よとおざかる。東に流るるを西と見る。南北もまたかくの

うんぬん う ぎ 遠

ちか

ごとし云々。浮き木にはとおざかれども近づくことはなし。

むりようむへんこう

いちげん

かめ

う

ぎ

あな

値

かくのごとく無量無辺劫にも一眼の亀の浮き木の穴にあり

ほとけと

たま

がたきことを仏説き給えり。

たと

ほけきよう

値

たと

値

この喩えをとりて、法華經にありがたきに譬う。たといあ

唱

だいもく

みようほう

あな

えども、となえがたき題目の妙法の穴にありがたきことを

こころ得

たいかい

しょうじ

くかい

かめ

われ

しゅじよう

心うべきなり。大海をば生死の苦海なり、亀をば我ら衆生

譬

てあし

無

ぜんこん

われ

み

具

にたとえたり。手足のなきをば善根の我らが身にそなわら

譬

はら

熱

われ

しんに

はちねつじごく

ざるにたとえ、腹のあつきをば我らが瞋恚の八熱地獄にた

せ 甲

寒

とんよく

はつかんじごく

せんねん

とえ、背のこうのさむきをば貪欲の八寒地獄にたとえ、千年

たいかい

そこ

われ

さんあくどう

お

う

大海の底にあるをば我らが三惡道に堕ちて浮かびがたきに

譬

せんねん

いちどう

さんあくどう

むりようこう

いちど

たとえ、千年に一度浮かぶをば三悪道より無量劫に一度

にんげん

う

しゃかぶつ

しゅつせ

値

譬

よ

人間に生まれて、釈迦仏の出世にあいがたきにたとう。余の

まつ

き

檜

き

う

ぎ

せんだん

松の木・ひの木の浮き木にはあいやすく、梅檀にはあい

いっさいきよう

あ

ほけきよう

たと

たし。一切経には値いやすく、法華経にはあい

せんだん

あ

そうおう

あな

えたり。たとい梅檀には値うとも、相応したる穴にあい

たと

ほけきよう

あ

かんじん

たきに喩うるなり。たとい法華経には値うとも、肝心たる

なんみようほうれんげきよう

ごじ

唱

値

南無妙法蓮華経の五字をとえがたきにあいたてまつるこ

難

とのかたきにたとう。

ひがし

にし

み

きた

みなみ

み

われ

しゅじよう

賢

東を西と見、北を南と見ることをば、我ら衆生、かしこ

顔 ちえあ よし しよう れつ おも れつ しよう おも とく

がおに智慧有る由をして、勝を劣と思ひ劣を勝と思ふ、得

やく ほう とくやく み き 叶 ほう き

益なき法をば得益あると見る、機にかなわざる法をば機に

ほう い しんごん すぐ ほけきよう おと しんごん き

かなう法と云う、真言は勝れ法華経は劣り、真言は機にか

ほけきよう き かな み

ない法華経は機に叶わずと見る、これなり。

おも 寄 たま ほとけ がっしこく い たま

されば思ひよらせ給え。仏、月氏国に出でさせ給いて

いちだいししようぎよう と たま しじゅうさんねん もう はじ

一代聖教を説かせ給いしに、四十三年と申せしに始めて

ほけきよう と たま はちかねん いつさい みでし みな によい

法華経を説かせ給う。八箇年がほど、一切の御弟子、皆、如意

ほうしゆ ほけきよう たま そうら にほん

宝珠のごとくなる法華経を持ち候いき。しかれども、日本

こく てんじく にじゅうまんり さんかい 隔 そうら

国と天竺とは二十万里の山海をへだてて候いしかば、

ほけきよう みようじ

き

しゃくそんごにゆうめつ

法華經の名字をだに聞くことなかりき。

釈尊御入滅ならせ

たま いっせんにひやくよねん もう

かんど わた たも

給いて一千二百余年と申せしに、漢土へ渡し給う。いまだ

にほんこく わた

日本国へは渡らず。

ほとけ めつご いっせんごひやくよねん もう

にほんこく だいさんじゅうだいきん

仏の滅後一千五百余年と申すに、日本国の第三十代欽

めいてんのう もう みかど おんとき ひやくさいこく

はじ ぶつぼうわた

明天皇と申せし御門の御時、百済国より始めて仏法渡る。

じゅぐうたいし もう ひと とうど はじ ぶつぼうわた たま

また上宮太子と申せし人、唐土より始めて仏法渡させ給い

このかた いま しちひやくよねん あいだ いっさいきよう

て、それより以来、今に七百余年の間、一切経ならびに

ほけきよう 広 たま かみいちにん しもばんにん いた

法華經はひろまらせ給いて、上一人より下万人に至るまで、

こころ ひと ほけきよう いちぶ いっかん いっぽん

心あらん人は法華經を一部、あるいは一卷、あるいは一品

たも

ふぼ こうよう

われ ほけきよう

持つて、あるいは父母の孝養とす。されば、我らも法華經を

たも

おも

くち なんみようほうれんげきよう とな

持つと思う。しかれども、いまだ口に南無妙法蓮華經とは唱

しん

に しん

たと

いちげん かめ

えず。信じたるに似て信ぜざるがごとし。譬えば、一眼の亀

値

せんだん しょうもく

かめ はら

のあいがたき梅檀の聖木にはあいたれども、いまだ亀の腹

あな

い

い

由 無

しゅゆ たいかい

を穴に入れざるがごとし。入れざればよしなし。須臾に大海

沈

にしみなん。

わ

ちようしちひやくよねん

あいだ

ほけきようひろ

たま

我が朝七百余年の間、この法華經弘まらせ給いて、あ

よ

ひと

と

ひと

くよう

ひと

るいは読む人、あるいは説く人、あるいは供養せる人、あ

たも

ひと

とうまちくい

おお

るいは持つ人、稲麻竹葦よりも多し。しかれども、いまだ

あみだ みようごう とな

なんみようほうれんげきよう

勸

阿弥陀の名号を唱うるがごとく、南無妙法蓮華経とすすむ

ひと とな ひと いっさい きよう いっさい ほとけ みようごう

る人もなく、唱うる人もなし。一切の経、一切の仏の名号

とな ぼんもく 値 せんだん はら

を唱うるは、凡木にあうがごとし。いまだ梅檀ならざれば腹

冷 につてん こう 温 め 肥

をひやさず、日天ならざれば甲をもあたたためず。ただ目をこ

ころ よろこ じつ はな み ことば

やし心を悦ばしめて、実なし。花さいて菓なく、言のみ

仕業

有ってしわざなし。

にちれんいちにん にほんこく はじ とな

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらす

い けんちようごねん なつ 頃 いま にじゅうよねん

ること、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の

あいだ ちゆうやちようぼ なんみようほうれんげきよう とな いちにん

間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華経とこれを唱うることは一人

ねんぶつもう

ひと

せんまん

よ

むえん

もの

ねんぶつ

なり。念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。念仏の

かとうど

うえん

こうき

しし

こえ

いっさい

方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声には一切

けもの

こえ

うしな

とら

かげ

いぬおそ

につてんひがし

い

の獣、声を失う。虎の影には大恐る。日天東に出でぬれ

ばんせい

ひかり

あとかた

ほけきよう

ところ

みだ

ば、万星の光は跡形もなし。法華經のなき所にこそ弥陀

ねんぶつ

なんみようほうれんげきよう

こえしゅつたい

念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華經の声出来して

しし

いぬ

にちりん

ほし

ひかり

たと

は、師子と犬と、日輪と星との光くらべのごとし。譬えば、

たか

きじ

等

鷹と雉とのひとしからざるがごとし。

ゆえ

ししゆ

嫉

じようげおな

憎

ざんにん

故に、四衆とりどりにそねみ、上下同じくにくむ。讒人、

くに

じゆうまん

かんじん

ど

おお

ゆえ

れつ

と

しやう

国に充滿して、奸人、土に多し。故に、劣を取って勝を

にくむ。譬^{たと}えば、犬^{いぬ}は勝^{すぐ}れたり師^し子^しをば劣^{おと}れり、星^{ほし}をば勝^{すぐ}れ

にちりん

おと

謗

じゃけん

日輪^{にちりん}をば劣^{おと}るとそしるがごとし。しかるあいだ、邪見^{じゃけん}の

あくみようせじよう

るふ

ざんそ

めり

悪名^{あくみ}世上^{じやうじやう}に流布^{りゅうふ}し、ややもすれば讒^{ざん}訴^そし、あるいは罵詈^{ばり}訾^ぎせ

とうじよう

なん

被

たびたびるざい

られ、あるいは刀杖^{とうじやう}の難^{なん}をかぶる。あるいは度々^{たびたび}流罪^{りゅうざい}にあ

ご

まき

きようもん

違

涙

たる。五^ごの卷^{まき}の経文^{きやうもん}にすこしもたがわず。されば、なんだ

そう

まなこ

浮

よろこ

いっしん

余

左右^{さう}の眼^{まなこ}にうかび、悦^{よろこ}び一^{いっしん}身^{しん}にあまれり。

ころも

み

隠

じき

いのち

支

ここに、衣^{ころも}は身^みをかくしがたく、食^{じき}は命^{いのち}をささえがた

れい

そぶ

こころ

ゆき

じき

いのち

持

し。例^{れい}せば、蘇武^{そぶ}が胡国^{ここく}にありしに、雪^{ゆき}を食^{じき}として命^{いのち}をたも

はくい

しゆようざん

住

わらび

折

み

助

ふ

ぼ

つ。伯夷^{はくい}は首陽山^{しゆようざん}にすみし、蕨^{わらび}をおりて身^みをたすく。父母^{ふぼ}

にあらざれば誰か問うべき。三宝の御助けにあらずんば、

いちにちかたとき

たも

げんざん

い

そうろう

いかでか一日片時も持つべき。いまだ見参にも入らず候

ひと

たびたびおん

音

信

人の、かように度々御おとずれのはんべるは、いかなるこ

奇

そうら

ほけきよう

だいし

まき

しゃかぶつ

とにや、あやしくこそ候え。法華經の第四の卷には、釈迦仏、

ぼんぷ

み

入

替

たま

ほけきよう

ぎようじや

くよう

凡夫の身にいりかわらせ給いて、法華經の行者をば供養す

由

と

そうろう

しゃかぶつ

おんみ

い

たま

そうろう

べきよしを説かれて候。釈迦仏の御身に入らせ給い候

かこ

ぜんこん

催

りゆうによ

もう

によにん

か。また過去の善根のもよおしか。竜女と申す女人は、

ほけきよう

ほとけ

な

そうら

まつだい

きよう

たも

法華經にて仏に成りて候えば、末代にこの經を持ちまい

によにん

守

たも

由 ちか

たま

おん

らせん女人をまぼらせ給うべきよし誓わせ給いし。その御

縁

そうろう

たつと

たつと

ゆかりにて候か。貴し、貴し。

こうあんになんつちのとうさんがつにじゅうろくにち

弘安二年己卯三月二十六日

まつのどののこけあまごぜんごへんじ

松野殿後家尼御前御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押